

出来損ない令嬢に転生したギャルが

見返すために努力した結果、

溺愛されてますけど何か文句ある？・2

登場人物紹介

CHARACTERS

チエルシー

現代日本の女子高生「キララ」
としての前世の記憶がある。
元はルーナンド侯爵家の
令嬢だったが絶縁、自由の身に。
明るく前向きでタフな性格。

バレンティノ・バレンツェ

王太子。チエルシーとは
幼い頃に面識がある。
優秀で誰にでも優しく、
悪く言えば誰にも執着を
示さなかったが、チエルシーと
親しくなると変化が。

ケンドール・ ダイヴ

公爵令息。チエルシーに
礼儀作法を教えてくれる
メイヴ夫人の息子で、
バレンティノの親友。

レオナルド・ダルトン

辺境伯家の長男。
バレンティノの従兄。
バレンティノや彼の弟である
セオドアと違い、
軽薄な言動が多い。

リリナとネル

チエルシー付きの侍女。
チエルシーを大切に思い、
ルーナンド家からついてきた。

マルティヌエターベル

伯爵令嬢。レオナルドを
一方的に慕ってつきまとって
いるという噂があるが……

スザナ・セルリウス

公爵令嬢。チエルシーの
初めての友達。メイヴ夫人の
姪でケンドールとは従兄妹。
チエルシーの応援で第二王子
セオドアと婚約関係に。

一章

「オレはチェルシーのことを気に入っているんだ」

「……え？」

「父上も君のことをきつと歓迎するはずだ」

バレンティノによく似た男性——レオナルドは抱きかかえたチェルシーを自分の方へと寄せて、頬にキスをする。彼の銀色の髪がさらりと肌を撫でた。

『『あの話』を前向きに進めたい。むしろチェルシーとだったら結婚したっていいよ？』

「け、結婚って……！ レオ、今は冗談を言っている場合じゃ……」

話が飛躍しすぎてチェルシーは驚くしかない。

どうしてこのタイミングでそんな話をするのか。

レオナルドは、ケンドールとはまた違う、兄のような存在だ。明るく優しく、チェルシーとノリが合う。だからこそ、先ほどまで話していた『あの話』は進めていいんじゃないかなと思っていたのに、一体どうしたことだろう。

「——レオナルド、ふざけるのもいい加減にしてくれ！」

割って入るようなバレンティノの怒鳴り声に、チェルシーは肩を揺らす。
ここまで怒る彼の姿は初めて見た気がした。

「ふざけてなんていない。こんなところは彼女に似合わない。もっと自由であるべきだ」

「そんなことはない。チェルシーは僕の……っ！」

「……ティノ？」

ぼつりと呼びかければ、バレンティノはそこで言葉を止めてしまった。

「僕の……なんだ？ 言ってみろよ」

「……うるさい」

バレンティノの険しい表情を見て、レオナルドの唇が弧を描く。

「お姫様だって、こんな余裕のない王子様は見たくないだろう？」

「チェルシー、レオナルドだけはやめた方がいい」

「ははっ、ひどいと思わないか？ なあ、チェルシー？」

二人に視線を向けられて戸惑う。自分はどう返せばいいのだろう。

(一体どうしてこんなことに……!?)

* * *

話は一週間ほど前まで遡る。

「——チェルシーッ!？」

「あ、ティノ！ 公務おつかれさま」

大きな声で名前を呼ばれ、チェルシーはそちらを振り向いた。バレンティノだとはわかっていたので、そのままひらひらと手を振って笑う。

公務帰りなのか、今日のバレンティノはこの国の王族の正装を着ている。いつもよりさらにかっこいいと素直に思う。

そんな彼が焦りながらこちらにやってきた。少し癖のあるミルクティー色の髪が揺れ、廊下の灯りで艶めいているのがとても綺麗だ。

「チェルシー、今日は何をしているんだい？」

「何って……行儀見習いのな？」

バレンティノはチェルシーの近くにいたリリナとネルに視線を送る。彼女たちはげっそりとした表情で首を横に振った。

「君はそんなことをしなくても大丈夫なんだよ？」

「でも何かしないと落ち着かなくて……」

「……そうか。チェルシーにとつてその方がいいなら構わないけど、無理はしないでくれ」

「うん！ ティノ、ありがとう」

二人が話しているのはレバレンジェ王国の王城だ。家族と縁を切りルーナンド侯爵家から自由になったチェルシーは、バレンティノと彼の家族……つまり王族の意向で、一時的にこの城に身を寄

せることとなった。

新しい暮らしはチェルシーにとって天国のようだ。

ルーナンド侯爵邸で過ごしていた日々が、どれだけ息苦しいものだったかが今になってわかる。あのとき、家にいる人間はリリナとネル以外、全員チェルシーの敵だった。

今は、好きなものを好きだと話ただけで文句を言われることも、兄妹きょうだいの失敗をチェルシーのせいでと罵られることもない。

(そういえば、元侯爵になったんだよね……今はルーナンド伯爵だっけ)

ダミアンとジェニファーは貴族ではなくなり、ルーナンド家自体も降爵されて領地の一部も王家に返上したそうだ。

両親はダミアンとジェニファーかわいさにずっと二人に甘かった。しかしそうやって二人の愚行を見て見ぬフリをしてきたせいで、大切にしていた彼らを失ってしまった。

結局、誰も守ることはできなかったのだ。

チェルシーもルーナンド家と縁を切ったため、彼らは親戚から養子をもらったそうだった。だが二人が起こした事件が噂になっていたせいで、養子をもらうのもかなり大変だったと聞いた。

彼らがこれからどうなるかは知らないが、チェルシーがルーナンド家に戻ることはない。両親を遠目に見ることくらいはあるだろうが、話すこともないだろう。

そう思ってからチェルシーは、思いの外すっきりしていない自分に気づいた。自由になったのはいいことであるはずなのに、胸にぽっかりと穴が空いたような空虚な気持ちを抱えていたのだ。

また、誰にもうまく説明できないがチェルシーの中には焦りがあった。

その原因はチェルシーが『出来損ない』と言われて育ってきたことにある。

誰かに必要とされなければ、誰かの役に立たなければいけない……その気持ちがふとした瞬間にチェルシーを責め立てるのだ。

今まで大変だったのだからしばらく休んでいいと言われても動いてしまうのは、それらの感情を解消するためでもある。

(じっとしていたら、いろいろと考えちゃうしね)

いつも話が弾むのだからとお礼が言えていないが、バレンティノと毎日会えるのもチェルシーにとって救いになっていた。

バレンティノは、忙しい中でも一日のどこかで必ず、チェルシーに会いに来てくれる。

彼とお茶をするだけで、ふんわりと心が軽くなった。それだけでなく、お茶会の終わりには毎回念を押すようにこう言ってくれる。

『チェルシー、困ったことがあったら僕に言ってね』

『些細なことでもいい。相談してくれ』

どれもチェルシーを気遣う言葉だ。それが今のチェルシーにとっては何よりの支えになっていた。バレンティノがそばにいてくれるだけで何もかも大丈夫だと思えるほどだ。

とはいえ、不安がまったくなくなったといったら嘘になる。だからこそバレンティノに会えない時間は王妃に許可をもらって侍女の真似事をしていた。だが、しばらくしてリリナやネルが止めて

くるようになった。

『チェルシーお嬢様、毎日朝から晩まで働きすぎです。私たちでもお休みをいただくんですよ』

『たまにはお部屋でゆっくりいたしましょう』

そう言っ、部屋で刺繍や読書をするのを勧められた。

チェルシーと共に城に来ることを許された二人は、仕え先が侯爵家から変わるにあたっさまざまな手続きがあつたようだ。けれど『お嬢様に仕え続けることは変わりませんよ』とそばにいてくれる。

彼女たちもまた支えではあるのだが……残念ながら、刺繍も読書も、チェルシーにとつては趣味ではなく立派な淑女になるための勉強だ。やるべきときにはやるが、好きでやるものではない。

こればかりは、前世で休みとなれば買物だ何だと外に出ていたキララとしての感情かもしれない。

結果、これが一番落ち着くからと押し切り、苦笑や呆れの表情を浮かべた二人がついてくる、というのが日常になつていた。最初は戸惑つていた王城で働く侍女たちも、今ではチェルシーによくしてくれている。リリナやネルが休みの日にまでチェルシーが働こうとすると、やっぱり制止しつつも代わりについてきてくれるほどだ。

だから、バレンティノにも二人と同じ言葉で押し切ろうと試みる。とはいえ、すでに彼とも繰り返し話した話ではあるのだ。

「体動かしての方が楽しいから大丈夫！ それにメイド服がかわいいんだもん！」

「……めいどふく？」

チェルシーが今着ているのは、王城の侍女服だ。しかし、前世で見たメイドカフェの制服を彷彿とさせる。そのため思い出の中の店で働いているようで気分が上がるのだ。

そうだと思ひ立つてチェルシーはスカートの端をつまむ。そのままくると回れば、スカートがふんわりと舞った。

一周したところでぱつとスカートから手を離し、かわいらしく見えるように口元に手を当てる。

バレンティノを見上げて小首を傾げながら、普段より少し高い声を出した。

「おかえりなさいませ、ご主人様！」

「——ッ！」

「メイドさんってね、こんな感じのかわいい台詞もあつて……」

キララとしての記憶の中にあるメイドの真似を試みたのだが、バレンティノは目を大きく見開いたまま、何の反応もない。

「……ティノ？ おーい、ティノ？」

「……………」

目の前で手のひらを振ってみるものの、やはりバレンティノは動かない。

（も、もしかして呆れられた……？）

見るに耐えなかったのかもしれないとチェルシーが反省していると、彼は手のひらで目元を押さえて、視線を逸らしてしまった。

(メイドさんの真似、よくなかった!? ティノが目を逸らすなんて相当痛かったかな!?)
 焦るチェルシーだが、すぐ近くで控えるネルたちは二人とも、チェルシーとはまったく別のことを考えていた。

『またお嬢様が、無意識に殿下を惚れ直させるようなことをなさっている』と……
 なぜならチェルシー側からは見えていないが、バレンティノが顔を真っ赤にしていたからだ。
 リリナとネルが温かく見守る中で、焦ったチェルシーは必死に言い訳を始めた。

「つ、つまりこの服がめっちゃかわいいからはいじゃったの! そ、それにニーハイも白ですごくかわいいんだよ? もう少しスカートが短ければ完璧なんだけど」

そう言つて再度スカートの裾を掴んだ瞬間、先ほどは止めなかったネルが飛んでくる勢いでチェルシーのスカートを押さえた。リリナもチェルシーが何をしようとしているのか察したのか、眉を吊り上げている。

「お嬢様、それは絶対にダメです!」

「バレンティノ殿下の前ではしたくないですよ?」

こちらを見る二人の顔が恐ろしい。

そこで初めてチェルシーは、この世界では、膝より上を晒すのは何か穿いた状態でもはしたないことであつたと思ひ出す。

「あはは……つい」

誤魔化すように笑つて、スカートからそつと手を離れた。

普段はもうこのようなことはないのだが、こうして前世の記憶をもとに動いているときは、たまにこちらの常識では考えられないことをしてしまう。

呆れられていないだろうか、恐る恐るバレンティノの表情を確認する。

「チェルシー、すまない……僕には刺激が強いかもしれない」

「――刺激!? そ、そんなに変わった? 嫌だった!?」

悪い意味で受け取ったチェルシーの顔が曇つていく。訂正したいが素直に告げるのは恥ずかしいバレンティノは、どうにか小声で否定した。

「違うよ、チェルシー……それは、だから……かわいすぎるとい意味で」

「え? 聞こえなかったからもう一言つてくれる?」

再びのチェルシーの上目遣いにバレンティノはたじたじだ。

しかし彼が手のひらで顔を隠しているため、チェルシーにはバレンティノの表情がわからない。困ったチェルシーはネルとリリナに視線を送るが、二人とも微笑んで見守るばかりで何も言ってくれない。実際のところ、リリナとネルを含めて、そばに控える侍女たちは皆、二人の関係にもどかしい思いを抱えていたのだが、ここですべて教えてしまうのは余計なお節介というものだ。

チェルシーが視線を戻したところで、バレンティノが咳払いをして、気持ちを整えたようだ。いつもの笑顔に戻る。

「ゴホンッ……チェルシー、とてもかわいらしいよ」

「本当!? ありがとう!」

リリナたちも安心してホッと息を吐き出していると……

「侍女服、やっぱりかわいいよね〜！ わたしもそう思うー！」

「……………」

バレンティノの表情がすつと冷める。

しかしチエルシーはまったく気づくことなく、ご機嫌でハタキを持った。

「さてと、仕事の続きをしないとね！」

「チエルシー、無理はしないでくれ」

「うん、ありがとう。でもさ……わたしは今、貴族の令嬢ともいえないし、こんなことしかできないから」

その言葉にはチエルシーの育ちによる思考の癖もあった。だからこそバレンティノも「それは……」と一瞬言いよどむ。

諸々の手続きが終わり、チエルシーが正式に元ルーナンド侯爵家の籍を抜け、バレンティノのもとに身を寄せてから二週間ほど経つ。

今、チエルシーは何者でもない。ただのチエルシーだ。

何故なら今の彼女には家族という形での後ろ盾がないからだ。チエルシーの血縁で問題がない家は子爵家や男爵家ばかりで心もとない。そのため現在、高位貴族でチエルシーを養子にしてくれる家を探していた。

(ケンのところもスサナのところも、権力のバランスとか、派閥の関係で難しいって、ティノが説明し

てくれたんだよね……)

チエルシーの養子先を王家が探す大義名分として、『ルーナンド侯爵令嬢時代にバレンティノの婚約者候補であり、令嬢自身にまったく罪のないことで高位貴族でなくなり候補から外すのは忍びないため』ということになっている。

そうなると、王家派の高位貴族の家々と王族とのバランスが難しくなってくる。

スサナの家、セルリーズ公爵家はスサナ自身が既にセオドアに嫁ぐことが決まっている。

同じ代の同じ家から二人も王家に嫁がせるわけにはいかないと遠慮するしかなかった。

ケンドールの家、メイヴ公爵家はケンドールがバレンティノの側近として確定済だ。そもそも何度も王妃を輩出しており、ケンドールとバレンティノが再従兄弟ということもあって、今回は手を挙げることができなかった。

ケンドールの家は三兄弟で娘がいないので、チエルシーを養子にできたらよかったのにと、メイヴ公爵夫人がとても悔しがっていた。

王族の親戚扱いにしてしまうのが一番どことの争いにもならないと思いきや、王妃の両親が早くに亡くなっていることもあり、王妃側の親族は後ろ盾としてはやや弱い。

臣籍降下したかつての王族の家は、ケンドールやスサナの家のように権力のバランスを見て遠慮したり、領地が王都から遠いことを理由に王子の婚約者候補を迎え入れることに難色を示したりしていた。

そうこうしているうちに、やや家格が足りない家や、家格は充分だが最近落ち目となっている家

から、チエルシーを養子に迎えたいと名乗り出る貴族たちが現れた。

表向きではチエルシーは婚約者候補の一人でしかないが、バレンティノの本命に近い位置にいることは周知の事実だ。王妃を輩出した家として格を上げる絶好のチャンスだと見なされたのだ。

さらに言えば、仮にバレンティノの婚約者となれずとも、チエルシーは次期王弟の妃となることが確定しているスサナとも仲がいい。

数多の貴族令嬢に教育を施してきたメイヴ夫人に『養子に欲しかった』とまで言わせたのだ。チエルシー個人としても、引き取る理由はいくらでもある。

チエルシー自身は、以前スサナにこの説明を受けた際、「わたしがすごいんじゃないかって、周りがすごいだけなんだけどな」と零して苦笑されている。

チエルシーだけは自身の価値をいまいち実感できないまま、次々と貴族たちが名乗り出る中、どうにか臣籍降下した家から中立派の家から選びたい王家の思惑が絡んで、情報が錯綜しているそう。社交界でもその話で持ちきりらしい。

「本当はすぐにでも手配したいんだけど、なかなか決まらないんだ」

「……大変そうだね」

「チエルシーが人気者だからかな」

バレンティノがフォローしてくれたことがわかったため、チエルシーも不安そうな顔はできないと笑みを返す。

「そういえば、チエルシーは最近の派閥や情勢に疎いって不安がってたけど、勉強は進んだ？」

「んー……伯爵家以上の家はなんとか。ティノと初めて会ったパーティーのとき、王家派の公爵家と侯爵家だけ頭に叩き込んで、あとは失礼のないよう名前だけって感じだったんだけど……」

メイヴ公爵やセルリズ公爵は王家派、以前いざこざがあったネザーの父親、ベネールガ公爵は中立派だ。なんだか貴族社会も大変そう、とぼんやり思っていた頃が懐かしい。

ちなみに、ベネールガ公爵は今のチエルシーならと養子として迎えるのに前向きだったそうだが、バレンティノが拒否したため成り立っていない。

その理由をバレンティノに聞いてみたところ、『ネザーは君の魅力に気づいてしまったから危ないよ』だそう。

正直意味がわからなかったが、続けて『ベネールガ公爵に思うところはないけど、ジェニファーやダミアンに騙されたネザーと君が義兄妹になるのは気分がよくないな』と言われたので、何か問題はありそうだと思うことにした。今のチエルシーにとってのネザーは、ジェニファーとダミアンの策略に巻き込まれてしまった可哀想な令息というイメージしかない。しかしネザーは気まずいだろう。

（彼の前で、おもいきりダミアンを殴ったしね。わたしとは一緒に暮らしたくないはず……）

この件はいろんな側面から考えなければならぬらしい。

「こればかりは仕方ないよ。慎重に動かないとね。チエルシーの幸せのためだから」

「ありがとう、ティノ」

「いいや、気にしないで。君が早く落ち着けるように頑張るよ」

「じゃあ、わたしはお掃除頑張るよ！」

「そういうことじゃないんだけどね……」

そう言いつつもバレンティノはチェルシーが掃除した箇所を見つけて褒めてくれた。

そのあと国王の元に報告に向かうバレンティノと別れて、チェルシーは侍女たちの仕事の手伝いに戻った。かわいいメイド服で掃除しながらお喋りするのは本当に楽しい。

お喋りといえば、最近はチェルシーを気遣ってくれているのか、スサナを介して仲良くなった令嬢たちとお茶をする機会が増えた。メイヴ公爵夫人も指導というつつ、チェルシーの様子を見にきてくれるし、ケンドールと会える回数も多くなっている。

（みんな優しくてありがたいな）

そんなことを考えながら、中庭を通りかかる。王城の庭は、ルーナンド侯爵邸よりも多くの種類の花が咲いていた。チェルシーにとつて王城で一番のお気に入りスポットだ。庭師の手伝いをすることもあり、今は草花の種類だけでなく育て方まで教えてもらっていた。

この近くの仕事をしていない日も、中庭のベンチに座って休憩することが多いのだが、そうするとよくバレンティノが顔を出してくれる。

（ティノはいつも話を聞いてくれるし、本当に優しいんだよね！）

バレンティノと話すのが一番楽しい時間になりつつある。そう自覚してチェルシーは小さく笑うと、次の仕事の場所へと軽やかに歩いていった。

その晩、掃除を終えて、夕食を済ませたチェルシーは自室でいつものように日記を書いていた。

これはチェルシーに前世の記憶が戻る前からずっと続けていた習慣だ。記憶が戻ったばかりの頃は、状況を理解するうえでここに書いてあることに随分と助けられた。

「よし、今日の分も書けた……！」

引き出しに日記をしまう。そのあとは国の歴史を覚え直したりメイヴ公爵夫人から出された課題をこなしたりする時間だ。内容によつては夢中になりすぎてしまい、朝まで勉強していたこともあったため、リリナとネルに『ほどほどにしてくださいね』と言われている。

ある程度読み進めたところで眠気を感じたチェルシーは、本をぱたりと閉じた。

（二人を心配させたらいけないから、そろそろ休もう……！）

寝る前に鏡台の前へと座る。髪を撫でながら改めて自分の顔を眺めた。

オレンジ色の少し癖がある髪は、リリナやネルの手入れでサラサラだ。

その髪をかき分けると、アメジストのような紫色の瞳がある。

垂れ目でうさぎのようにかわいらしい顔。ぶにぶにとした頬を人差し指で突いてみる。

この顔を自分の顔だと認識できるようになったのは最近の話だ。

前世の記憶を思い出してからというもの、キララの人格が前に出ていた。もしくは幼い頃の明るいチェルシーが戻ってきたというべきだろうか。

（キララはチェルシーで、チェルシーはキララなんだよね。なんだか今でも不思議な感じ）

キララとして、やりたいことや未練はたくさんあった。その後悔や未練は今もチェルシーの中に強く残っている。

前世の記憶を思い出す前のチェルシーとしての後悔や未練はあるが、今は前世のものの方が強い。こうして鏡を見ていて、まず思いつくのが外見に関することだ。髪型やメイク、ドレスをもっと派手にしたいのだが、今はネルやリリナがチェルシーに似合うドレスを選んで、メイクをしてきているし、チェルシーが自分でやろうとすると止められる。

たしかに二人が整えてくれるのはかわいいし、チェルシーの顔にギャルメイクは似合わないのかもしれない。

(でも、何かが足りないというか……わたしらしくないというか)

あのとときの感覚が恋しくて仕方ない。

大好きなメイクやおしゃれを自分自身でやることは、何より自分を強くしてくれた。

(似合わないものを無理にやるつもりはないけど……何か他にできることないかなあ……)

ペタペタと自分の顔を触れていると、ふと手の爪が目に入った。

綺麗に切り揃えられているが、そこに鮮やかな色やストーンの輝きはない。

(……ずっと思っていたけど、この世界にネイルはないのかな？ 今度スサナに聞いてみよう)

自分の力で、自分らしく人生を楽しみたい。

ずっと気持ちを押し込め続けたチェルシーだからこそ、そう思うのかもしれない。

(そういえば、キララだった頃のわたしは、ネイリストになりたいって思っていたんだっけ)

将来、親友のラブちゃんは美容師に、キララはネイリストになるのだと宣言していた。

同じ美容専門学校で学ぼうと約束していたのだ。

そしてラブちゃんはキララの髪を、キララはラブちゃんの爪を毎月綺麗にする。

そんな約束をカフェでしたことを思い出す。

そのために付け爪を作って練習してはラブちゃんに見せていた。

(ラブちゃん元気にしてるかなあ……わたしがいなくなってから立ち直れなくなっていたらどうしよう)

そう考えて、すぐ首を横に振る。きつと寂しい思いをさせてしまったに違いない。でもラブちゃんがそこで立ち止まるような人間ではないことは、自分がよく知っている。

そこで美容師の夢を諦めるくらいなら『キララにできなかったぶんまでたくさん女の子を綺麗にしてやる』と決意に燃えていそうだ。

(ふふっ、ラブちゃんなら素敵な美容師になれているよね！)

つらいことがあっても、自分の好きなことのためなら乗り越えられる。

それは近くにメイヴ公爵夫人がいて、彼女が講師という仕事に誇りを持っているからこそ、そう思ふのかもしれない。セオドアの隣に立つために努力を重ねたスサナが、ラブちゃんによく似ているというもあるだろう。

(……わたしも、頑張らないと！)

チェルシーはもうネイリストにはなれないけれど、自信のない女の子を綺麗にする手伝いが必要だと思ふ。

そのためには自分磨きも頑張らなければならない。

（もうすぐ社交シーズンなんだよね。素敵なドレスがたくさんあるんだろうなあ……ヘアメイクも参考にできるもの、いっぱい見られそう）

王城で手伝いをしていると、城の中や周辺がよく見えてくる。

近頃、城の裏門に荷馬車が停まる数が増え、商人がひっきりなしに出入りするようになった。乗馬やお茶会、舞踏会に晩餐会など、もうしばらくすると社交シーズンならではのイベントが盛りだくさんらしい。

（ティノが舞踏会に誘ってくれたんだよね……本当にわたしが出てもいいのかな）

チエルシーはかつて、家族の影響で消極的になってしまった。だからジェニフアーやダミアンのように表に立つことに慣れていないし、積極的にパーティーやお茶会に参加することもなかった。経験の少なさだけは、キララの記憶を取り戻して性格が変わってもどうにもならない。

（わたしは同年代の子に比べて、圧倒的に社交慣れしてない。舞踏会はダンスも踊らないといけなし……）

チエルシーは座学が得意だったが、コミュニケーションや表に出ることは苦手だった。

自分に自信がないことや、事あるごとにジェニフアーがチエルシーの邪魔をしていたことが原因だと、今ならばわかる。

ドレスについて令嬢たちに何かと批判されたり、両親に様子を報告されて叱られたりと失敗を積み重ねた結果、前に出ることが怖くなってしまったのだ。

（メイヴ公爵夫人にまだまだ学ぶことはたくさんあるって言われたし、王妃様も応援してくれる。

城の中のお手伝いだけでなく、素敵な令嬢になれるようにやれること、いろいろ頑張ろう！）

チエルシーはそう思いつつ、ベッドに向かい眠りについた。

次の日、チエルシーは起きるとすぐに、汚れても大丈夫な服装に着替え始めた。

「チエルシーお嬢様、まさか……」

「うん、今日も手伝いをするつもり！」

「いえ、それは今更止めませんが……以前汚したその侍女服ということは……」

「庭師さんが新しい花の種を植えるみたい。だから一緒に植えさせてもらうんだ」

仲良くなった庭師に、一緒に花を植えようと誘ってもらったのだ。最近植物について教わっており、暇なときに許可をもらって花を摘んでは花冠を作っていたからだろう。いろいろな色の花を植えたなら、もっと華やかな花冠を作れるようになるからと提案してくれたのだ。

「ネル、バレンティノ殿下に報告をお願い。今日のお嬢様の支度は私一人でできそうだから」

「わかったわ。チエルシーお嬢様、私はそのまま、朝食を取りに行つてまいりますので、しばらく席を外しますね」

「二人とも、いつもありがとう！」

ネルとリリナにとっても慣れない場所だろうに、こうしてすぐにやるべきことを分担して動いてくれている。二人には感謝するばかりだ。

今日はこの時間に抜けることになったが、ネルは元々、お昼までのどこかでバレンティノにチエルシーの予定を報告しに行っているそう。リリナが教えてくれた。そういえば午前中に二人とも

いなくていいときはネルがないことが多い。

今日は早めに動いたということは、念のためバレンティノに許可を取った方がいいのだろう。

（一応、両陛下には好きにしているとは言われているけど、好きに動き回りすぎるのはよくないもんね）

バレンティノの両親である国王夫妻と最後に揃って顔を合わせたのは、チェルシーが城に来たばかりの頃だ。自分の家だと思ってくれていいと優しく声をかけてくれた。

城の人たちも、心配そうな目を向けたり、あたたかく見守ったりと最初からとても優しくかった。けれど、その頃のチェルシーは、家族の呪縛から完全に解き放たれたように見えて、それらの優しさや気遣いをうまく受け取れていなかった。

家族との縁を切ってまでここに来たからには完璧でいなければいけないと、一週間ほど睡眠時間を削って勉強していたのだ。

結果、その頃はいつも寝不足でふらふらしていたし、目の下にもクマが出来ていた。そんな状態で刺繍もつとうまくなろうとがんばったせいで、気づいたら指も傷だらけだった。リリナとネルは止めてくれていたが、聞く耳を持てなかった。

バレンティノが毎日顔を出してくれるようになったのは、その頃からだっただろうか。

『チェルシー、無理はいけないよ』

『わたし、無理してないよ？』

そう言ってもバレンティノは納得する様子はなかった。

思えば、ネルが一言断りを入れて席を外すようになったのはこの件があつてからだ。予定を確認して、気にかけてくれるようになったのだろう。

「……そういえば、王妃様とお茶してから、もう一週間経つんだね」

「ええ。ちなみにお嬢様、今日も午後にはお茶に誘われておりますが、まさかお忘れではありませんよね？」

「大丈夫！ ちゃんとお昼には戻ってきて、準備してお茶しに行くから」

ここに来てから初めて二人でお茶をしたときも、王妃は優しくかった。

王妃と二人きりでのお茶会という状況に、淑女としてちゃんとしなければと緊張していたチェルシーを見て、人払いをして多少無作法があつても大丈夫なように気遣ってくれたのだ。

そうしてテーブルに並べられたおいしそうなお菓子や花の香りのする紅茶は、どれもチェルシーの好きなものばかりで、思わず『かわいい！』と声を漏らしてしまうほどに素敵なお茶会だった。

『あなたのためというだけではないのよ。わたくし、こういうのが夢だったの』

そう言って微笑んだ王妃は、よくメイヴ公爵夫人と『もしも自分に娘がいたら』という話をしていたそうだった。ドレスを選んだり、お茶をしたりとやりたいことはたくさんあるのだという。

王妃もメイヴ夫人も、息子しかいない。家の跡継ぎは原則男児にとされるこの国で息子を複数人産んで立派に育て上げているのは理想の妻であり母であると言われているのだが、実現できなかった夢もある。

それをチェルシーが王城に身を寄せたことでいくつか叶えられて嬉しいそうだった。

二人の微笑ましいエピソードに、チェルシーも笑顔で話を聞いていた。

『ふふっ、あなたのようなかわいらしい子が本当に娘になってくれたら、わたくしも嬉しいのだけど』

『そう言っていただけで光栄です』

『メイヴ公爵夫人もそう思っているわ。あなたはこうして話しているだけで場を明るくするわね』
会話を重ねて王妃と打ち解けるうち、チェルシーは自身の悩みを相談していた。

『そう……もしかしてとは思っていたけれど、やっぱり社交シーズンは不安なのね』

『はい。今まで人前に出ることが苦手だったので……』

チェルシーは膝の上でギュッと拳を握った。

幼い頃から“出来損ない”と言われ続けたことで、どんどん自信がなくなっていた。

前世のキララも、最初からはつきりと物を言うタイプだったわけではない。自分に自信がなくて、言いたいことを言えない時期もあった。

幸い前世では家族にも教師にも恵まれていたから、自分に責任のないことで叱られることはなかったし、無意味に自信を削り取られることはなかった。そして、SSで自分の意見をはっきりと言う強いギャルに憧れたのがきっかけで、人生が変わったのだ。彼女たちのように強くなりたいと、自分磨きを始めたことは、今でも鮮明に思い出せた。

ギャルになって、ラブちゃんと出会って親友になれたことで、またキララの世界が広がった。好きなものを好きだと言って、自分のやりたいことに向かって努力するのが楽しかった。

チェルシーにだって、リリナやネルがいて、メイヴ夫人がいて、スサナやケンドール、バレンティノがいる。ただ、最初に自分を無条件で肯定してくれるはずの家族がいなかった。前世の記憶が戻るまで、こうなりたいと思える姿がなかった。

『……つらかったわね』

氣付けば王妃が眉を寄せて、こちらを見ていた。チェルシーの気持ちに寄り添ってくれているのだろう。

チェルシーは小さく首を横に振った。つらいこともあったけれど、今は前向きな気持ちでいるからだ。

『わたし、変わりたいんです』

『……チェルシー？』

『王妃陛下やメイヴ公爵夫人のような、立派な淑女になりたいです！』

『まあ……！ ありがとう。嬉しいわ』

この世界にギャルはいないが、目標となる女性たちを見つけることができた。

自分の考えを持って、自分でしっかりと歩んでいるところが、とても魅力的でかつこいと思っていた。

『わたくしも最初から完璧だったわけじゃないわ。経験を積んでいけばある程度は自然と身につくものなのよ』

そうは言われても、今のままの状態で、将来二人のようになっている自分を想像するのは難しい。

チェルシーの表情から考えていることがわかりやすかったのか、王妃が微笑む。

『ふふっ、あなたなら大丈夫よ。立派な淑女になれるわ』

『ですが、パーティーでのマナーも全然で……』

引き続きメイヴ公爵夫人の指導を受けてはいるが、細かい部分はまだまだだ。

メイヴ夫人からは『細かい部分に気を配って、ここが足りないと自分で気づけるようになっただけ進歩していますよ』と言われたが、学ぶべき点が多いことには変わりはない。

するとチェルシーの気持ちを感じ取ってか、王妃は優しく諭すように声をかけてくれた。

『チェルシー、いきなりすべてを得ることは難しいと思うわ』

『……………はい』

『積み重ねたものが自分の力になるの。そんなに焦らなくていいのよ？』

王妃が気遣って言うてくれていることはわかる。けれどチェルシーはすぐに納得することはできなかった。

『チェルシー、あなた最近無理をしていると詰め込んでいるでしょう』

『大丈夫です。それに少しくらい無理をしないと、皆さまに追いつけないですから』

それを聞いた王妃は困ったように微笑んだ。

そして言葉を選ぶように少し考えたあとに口を開く。

『……努力しようという気持ちはとても素晴らしいと思うわ。だけど、あなたが無理をして何かあったら、心配する人がたくさんいるということは、覚えておいて』

『……！』

王妃はそこで立ち上がると、チェルシーのそばまでやってきて、そっとチェルシーの手に自分の手を重ねた。優しい体温が肌を伝ってくる。

『わたくしはあなたの気持ちを尊重するわ。けれどね、社交なんてそもそも、失礼がなければ人とまったく同じである必要なんてないのよ』

『ですが、皆さまはもつと……』

スサナやケンドール、バレンティノはもちろん、年下のセオドアさえ習得していることがチェルシーにはできない。彼らはマナーも社交もダンスもすべて完璧だ。

少しずつ追いかければいいと努力していた時期もあったが追いつけないほどの差があることが見えてしまう。きっと普通に努力しているだけでは、彼らの隣に立って見劣りしない振る舞いができるようになるまで、十年年もかかってしまう。

『時には比べられるときがあるかもしれない。だけど、それを怖がってあなたの誇るべき部分を潰してしまうのは、とてももったいないことだわ』

『わたしの……？』

『そうよ。あなたは場にいるだけで人を明るい気持ちにさせるわ。そして、あなたはその空気を保ったまま、誰にも恥じない淑女へと変わろうと努力している。それは誇るべきことだわ。がんばっている自分をたくさん褒めてあげましょう？』

王妃の言葉は嬉しいが、今の自分を褒めるのは難しい。どう返せばいいのかわからないチェル

シーの反応は、王妃にとつても予想通りだったのだろう。

『随分と無理しているみたいなのに、自覚していないみたいだったから。侍女たちも心配していたわ』

そう言つて、王妃はチェルシーの頬を撫でた。化粧で隠したつもりだったが、お見通しだったのだろう。

『今までの環境がそうさせてしまったのかもしれないけれど、最初から完璧じゃなくてもいいのよ。今までずっと社交を邪魔され続けてきたのに、最低限仕上げてみせて自分を誇りなさい』

王妃の力強い言葉がチェルシーの心に響く。

チェルシーが今、一番欲しい言葉だったと、言われてから気がついた。

自然と涙が頬を伝う。驚いて必死に涙を拭いても、止まる気配がない。

『あ、あれ……？ 申し訳、ありません……』

『それだけあなたががんばってきたということよ。大丈夫、必ずうまくいくわ』

そこでとうとう堪えきれず、王妃に抱きついた。そして小さな子どものように、今まで抱えていた苦しさを吐き出すようにして泣いたのだった。

王妃はチェルシーが落ち着くまで、黙って背中をさすってくれた。

落ち着いたときには、そつと王妃付きの侍女がおかわりの紅茶を持ってきてくれていた。

あとになって聞いた話だが、チェルシーに何もできずもどかしい気持ちを抱えていたリリナとネルは、王妃の考えや行動を読んですつと空気を壊さず動いたこのときの王妃付き侍女に、非常に刺

激を受けたそうだ。

王妃に勧められて紅茶をいくらか飲んだ頃には、思いきり泣いてしまった恥ずかしさもありつつ、心がすつきりと軽くなっていた。

『あのね、チェルシー。こんなことを言ったら疑問に思うかもしれないけれど、今はあなたに思いきり好きなことをして欲しいの』

『わたしの好きなこと、ですか？』

『最終的にはあなたが選択することよ。でもね、あの子が諦めると思えないから……』

王妃は席に戻り、紅茶が入ったカップを持ち上げている。

あの子とは誰なのか聞いてもいいのか考えているうちに、王妃の美しい所作に目を奪われてしまう。

『だからここにいる間だけでも好き放題しちゃいなさい。あなたには後悔してほしくないもの』

『へ……!? はい、わかりました！』

よくわかっていないチェルシーだが、とりあえず頷いておく。

そんな考えすらも見透かされているようで、王妃は少し茶目つ気のある笑みを浮かべた。

『うふふ、どうなるか楽しみだわ。ライバルは多くなりそうだから、バレンティノには急いだ方がいいと伝えないとね』

『……バレンティノ殿下ですか？』

『そうそう。気持ちだけでもちゃんと伝えないと、そのうちライバルが現れて横から攫^{さら}われちゃう

かもしれないし、チェルシーが誰かを好きになるかもしれないでしょう？ セオドアもだけどバレンティノも意外と奥手なんだから』

自分のことやバレンティノのことはよく理解できなかったが、セオドアが奥手というのはわかる。セオドアとスサナのじれつたいやりとりは、すぐに思い出せるからだ。

ケンドールやバレンティノによれば、二人はかなり幼い頃からずっとすれ違っていたそうだ。周りはさぞじれつたかったに違いない。

結ばれた今、二人は心の底から幸せそうだ。そのことが嬉しいと素直に思う。

セオドアとバレンティノの名前が出てきたということは、彼にも特別に想う相手がいるということなのだろうか。王妃の口ぶりからして反対しているようには聞こえないため、婚約者候補の中にいるのかもしれない。

以前、恋をしてみたいと言ったチェルシーに「僕なんかどうかな？」と返されたことはあるが、あれはスサナとセオドアがうまくいって羨ましくなったチェルシーを気遣ったの冗談だろう。

(もしもティノに好きな人がいるなら………その人が婚約者になるのかな)

そう思うと、友だちが幸せになるのは嬉しいことのはずなのに、なぜか心がぎゅっと締めつけられるように痛くなる。

もやもやした気持ちを抱えたまま、少し冷めた紅茶が入ったカップを手にとった。チェルシーの内心を知ってか知らずか、王妃が呟く。

『二人とも、そういうところは若い頃の陛下にそっくりだわ』

『国王陛下もですか!? 王妃様の恋バナ、是非聞かせてください!』

『あらあら』

恋バナと聞いたら黙ってはいられない。

チェルシーが目を輝かせていると、王妃はクスリと笑ったあとに国王との馴れ初めを話してくれた。胸がキュンとするエピソードばかりで、その場は大盛り上がりだった。

プロポーズのことを話し終わる頃には、王妃はほんのりと頬を染めてかわいらしい笑みを浮かべていた。

『そうだね。メイヴ公爵夫人の恋バナも聞いてみたらどうかしら』

『メイヴ公爵夫人の恋バナですか!?』

あの厳しい姿からは想像できない甘酸っぱい話があるというのだろうか。

『彼女は子爵家の出身だったから本当に努力したのよ。メイヴ公爵との馴れ初めはまるで物語のよう素敵だったわ』

『——是非とも聞きたいです!』

チェルシーはその話を聞いて大興奮だった。

しばらく恋バナで盛り上がりついていると、あつという間にお茶会を締めくくる時間になってしまった。

『チェルシー、何かあればバレンティノを頼りなさい』

『はい、ありがとうございます』

『あと、あなたに何か言う奴がいたら、わたくしに報告してちょうだいね。許さないから』
『は、はい!』

につこりと微笑む王妃の表情はなんとも恐ろしい。

『今は自由を楽しんでね。チェルシー、あなたを応援しているわ』

その言葉に胸が熱くなった。こうして全面的に味方をしてくれることが、今のチェルシーにとつては嬉しくてたまらない。

『王妃様、好きすぎる……!』

『……あら』

『あつ、申し訳ありません! つい、心の声が……!』

思わず口から漏れてしまった本音。慌ててカバーしようとするも、しっかりと耳に届いていたようだ。

焦るチェルシーだったが、彼女が嬉しそうに頬を赤らめているのを見て動きを止めた。

『チェルシー、わたくしもあなたが好きよ』

王妃の優しい笑みにチェルシーの頬も、ほんのりと色づく。

『あ、ありがとうございます……!』

『本当にあなたが娘だったらいいのに……。余計なお節介をしてしまいそう。もう一度バレンティノに気合いを入れるように言わないと』

『……?』

後半の方はよく聞こえなかったが、バレンティノという名前だけはなぜか耳に届いた。

(王妃様、何かティノに言いたいことがあるのかな?)

そう思ったが、結局直接聞けずじまいだ。

それから王妃は忙しい合間をぬって、お茶に呼んでくれたり、食事に誘ったりしてくれる。

王妃とバレンティノが気遣ってくれることで、どうにか息抜きをしながら勉強や立派な淑女になる努力をしていた。

その息抜きが王城内の手伝いなので、結局リリナやネルにはハラハラさせている気がするが、こればかりは許してほしい。

『……あの時は言いそびれちゃったけど、いつも心配かけてごめんねリリちゃん』

『いいえ。いろいろと申しはしますが、お嬢様が健やかでいてくだされば、私とネルはそれで充分です』

『うん、ありがと』

そんな会話をしながら、朝食前にある程度支度を整える。

『日焼けしないようにしなければなりませんね』

『うん、そうだね。またティノが飛んでくる前に済ませないと!』

『バレンティノ殿下はチェルシーお嬢様を見て、いつも驚いていらつしやいますものね』

『ティノは大袈裟だから』

そこでネルが戻ってきた。バレンティノが朝から公務で直接の報告が難しかったため、彼付きの

従者の一人に報告したそうだ。

やはり社交シーズンが近づくと、バレンティノやセオドアは忙しいようだ。社交シーズンでなくとも王族は大変そう。こうして間近で見ているからこそ気づくことができた。以前はこの合間を縫って、チェルシーに会いにルーナンド邸まで来てくれたと思うと嬉しくなる。

(ティノはすごいな……自分の役割を完璧にこなしているんだもの)

セオドアがバレンティノに劣等感を覚えていたのもわかるような気がした。

あそこまで完璧だと『自分なんて……』と、思ってしまうのも無理はない。

チェルシーも、ダミアンとジェニファアに対して同じように思っていたが、それとはまた別だろう。相手に悪意がなくても、絶対に越えることができない壁があれば絶望してしまうものだ。

だけど今ならばわかる。セオドアにも伝えたが、自分には自分のできることがあるしよさがある。そう考えることで心が軽くなったチェルシーは支度を終えて、朝食を済ませる。そして中庭へと向かった。

今日はとてもいい天気だ。窓から差し込んでくる光が温かい。

城の長い長い廊下を歩きながら、改めて気合を入れる。

(わたしも頑張ろう！ そういえば、せっかく今日のお茶会で話すんだし、スサナだけじゃなくて王妃陛下にもネイルのこと、聞いてみようかな)

リリナやネルとネイルについて話しながら歩く。一歩下がって控える形で歩いている二人と話す

となると、見なくていいと言われてもチェルシーはどうしても振り返ってしまう。

当然、周囲の確認がおろそかになり、ネルが注意を促そうとした矢先に前から来た誰かにぶつかってしまった。

「きゃっ……！」

そのまま後ろに倒れそうになってしまい、衝撃に備えて目を閉じた。

しかし、いつまで経っても痛みはない。

(あれ……痛くない?)

ゆっくりと瞼を開けると、目の前には銀色の髪と空のようなライトブルーの瞳が見えた。バレンティノやセオドアによく似た、しかし見知らぬ年上の男性だ。

(ティノのお兄さん？ いやいやティノの兄弟はセオドアだけ。じゃあ、この人誰?)

二人によく似ているのに素性のわからない相手に、チェルシーは驚いて動けなかった。

「すまない、大丈夫か？」

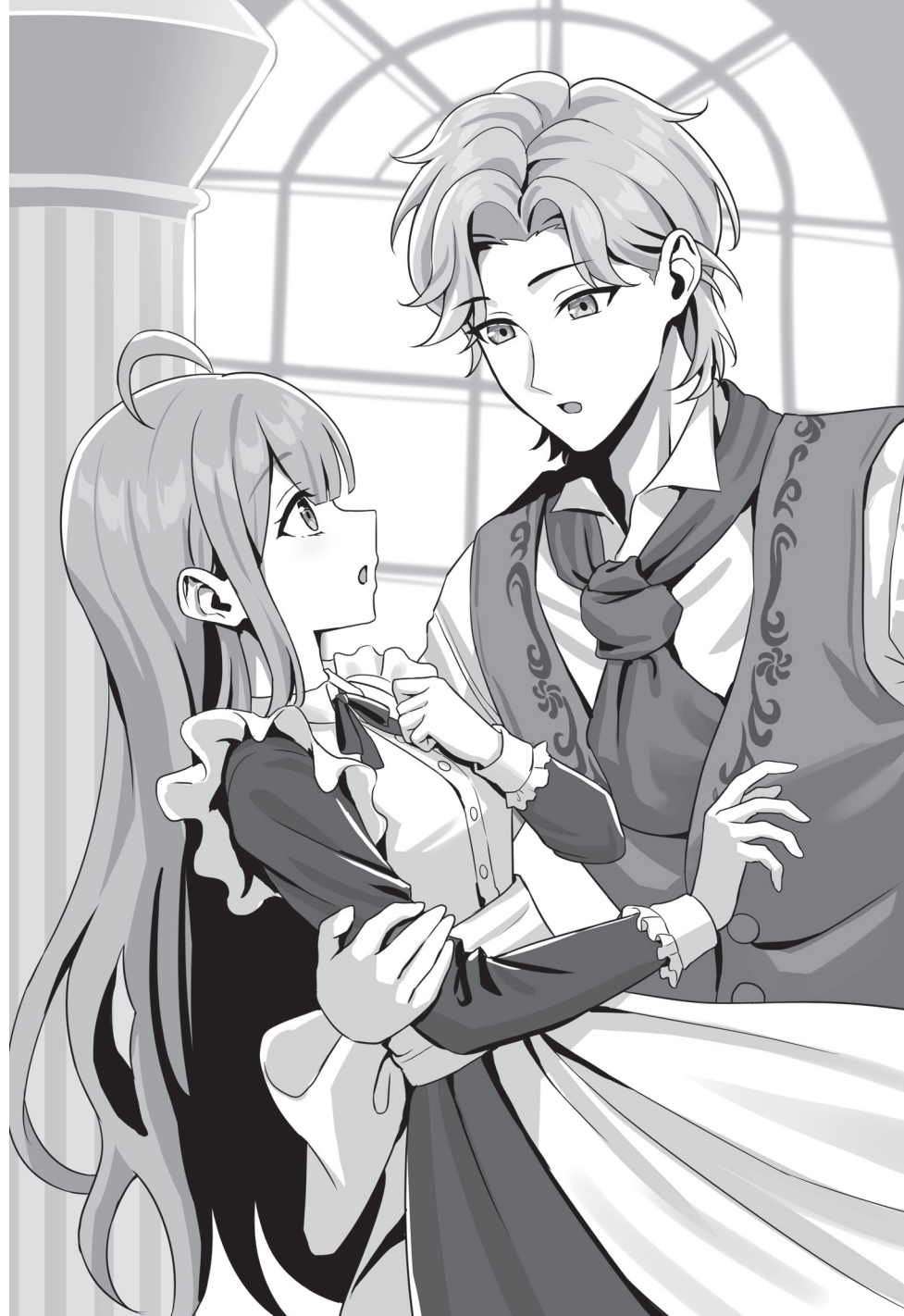
その声とともに、自分が倒れなかった理由に気づく。

彼の逞しい腕がチェルシーの背に回っていた。彼が腕を回して助けてくれたのだ。

「あ、あの……」

「ああ、すまない」

再度の謝罪とともに完全に助け起こされ、体から力を抜いた。淑女として振る舞わないといけない、体勢を整えて謝罪をしようと思っていたときだ。



「どうしてここにいるんだ？」

「え……？」

「オレンジの髪に紫の瞳……君は元ルーナンド侯爵家のチエルシー嬢だろうか？」

「どうしてわたしの名前を？」

チエルシーが首を傾げると、男性は目を丸くした。その反応にチエルシーはまさか以前会ったことがあったのだろうかと思いを絞る。

しかしどんなに記憶を遡っても彼のような遅く快活そうな雰囲気男性と挨拶した記憶はない。初対面だと思いたい。

「どうしても何も、今の社交界は君の話で持ちきりなんだろう？」

ルーナンド家のことが社交界で話題に上がることは知っていた。その話を聞いたということだろうか。それにしても疑問形であることが気になる。

王城に出入りできるのに社交界の噂を直接聞いたわけではない。それにバレンティノに似た知らない男性。彼の立場がわからず、チエルシーは返答に迷う。

すると男性は一瞬だけ驚いたように目を見開いた。

「その服……城で行儀見習いをしているのか？」

チエルシーはどう答えるか迷っていた。自分の今の状況をうまくまとめることができない。口をばくばくさせながら戸惑っていると、不意に男性の雰囲気が変わった。

「なるほど。それならちょうどいい。今晚、一緒にディナーでもどう？」

「……ディナー？」

「君のことをよく知りたいたいと思つていたところなんだ」

「わたしのことを、ですか……？」

「もちろん。チェルシー、君のことだよ」

チェルシーの腰に腕を回したまま、反対側の手ですつと顎を持ち上げられた。

女性が好きそうな甘い顔。ニコリと笑ったときに八重歯がのぞくのが見えた。

それが猫みたいでかわいらしくも体格は筋肉質で男らしい。

世間知らずの令嬢ならば、ここで頬を染めたのかもしれないがチェルシーは眉を顰めた。

(どう見てもチャライ……女慣れしてそう?)

チェルシーは若干、引き気味だ。

しかしなぜだか感じる懐かしさに似た気持ちに、じつと男性を見つめる。

ライトブルーの透き通った瞳。こちらは髪と違い、バレンティノやセオドアと同じ色ではない。

特にバレンティノとはまったく違う色だ。

それでも二人に似ているからこんなことを感じるのだろうか、不思議な感覚になった。

「そんなに見つめられると照れるな」

「あつ、申し訳ありません」

謝罪をして、彼から離れようとするが、チェルシーの腰に回った腕の力は弱まらない。

「まだディナーの返事を聞いてないんだけど」

答えるまでは逃さないと言わんばかりだ。リリナとネルに視線で助けを求めるが、相手が誰かわからない以上、彼女たちも軽々しく動けない。

(お城でお世話になつてゐる状態だから、迷惑になりそうなことはしたくなかつただけ……。でもこれナンパだよな? ナンパは無理! 断つてもいいよね?)

そう判断したチェルシーが声を上げようと口を開いたときだった。

「——チェルシーッ!」

チェルシーの名前を呼ぶ鋭い声。

なんとか顔だけそちらに向けると、そこには険しい顔でこちらに駆け寄ってくるバレンティノの姿があつた。リリナが「バレンティノ殿下……!」と安堵の声をあげる。

「レオナルド、チェルシーから手を離してくれ!」

バレンティノが手を伸ばして、チェルシーの腕を取ろうとする。しかし彼は軽々とチェルシーを抱えて避けた。まるでダンスのように軽やかに持ち上げられ、チェルシーは目を見開く。

怒りを露わにするバレンティノに、レオナルドと呼ばれた男性は楽しそうに口の端を吊り上げて笑つた。

「珍しいな、バレンティノ。そんなに余裕のない表情でどうしたんだ?」

「今すぐに彼女を離してくれ」

バレンティノの声は低い。まっすぐにレオナルドを睨みつける眼光は、まるで敵に向けるものようだ。

「ふーん、やっぱりこの子は君の特別なのかな？」

「……………君には関係ない」

「凶星か！ 今回の滞在は楽しくなりそうだ」

ケラケラと楽しげに笑うレオナルドと険しい表情のバレンティノ。二人のまとう雰囲気は真逆だ。その間、チェルシーといえば、足こそ床に着いたものの、再度がつしりと腰に腕を回されて抜け出せない。

離してほしいと目で訴えるも、彼は笑うだけだ。

（……………ティノもなんか怒ってるし、遠慮しなくていいよね）

痺れをきらし、レオナルドがバレンティノに向き直ったタイミングで、踵で足を踏みつける。今は靴も侍女用のものなので高さはなく、痛みもそこまでなかっただろう。それでもチェルシーの行動に驚いたレオナルドの力が一瞬だけ弱まった。

その瞬間を逃さず、チェルシーは彼の腕の中から抜け出す。

「……………！ かわいい顔をしておてんばなレディだ」

チェルシーはそのままバレンティノのもとに向かい、同じようにレオナルドを睨む。安心した様子のリリナとネルが視界の端に映った。

それにしても、名前しかわからない目の前の男性は一体どういう立場の人間なのだろう。

先ほどバレンティノと名前で呼んでいたことを考えると、かなり親しい間柄、つまり高位貴族のはずだ。しかしチェルシーは彼のことを見たことがない。

チェルシーを守るように前に出たバレンティノに、そっと近づいて小声で尋ねる。

「ティノ、知り合い？」

「ああ、よく知っているよ。対処するから、詳しい話はあとで」

そう言っ、バレンティノはレオナルドを牽制し始めた。

「今後は彼女に気安く触れないでくれ」

「それは約束できないなあ。今、彼女にディナーを申し込んでいるんだ」

「今日、チェルシーは母上とお茶の約束をしている。残念だったな」

「王妃陛下と？ へえ……………なるほどねえ」

彼は顎に手を当てて、納得するように頷いた。

「となると、彼女はバレンティノの婚約者候補か」

「……………そうだ」

「だが、まだ候補だろう？」

「……………」

バレンティノの表情がさらに険しくなった。

「なら、チェルシーはどうしてこんな格好を？」

「いろいろ事情があるんだ。君には関係ないよ」

「関係なくはないだろう。ダルトン辺境伯領には情報が回ってくるのが遅い。オレがこうして定期的に王都の噂を取りにこないと支障が出るって、わかりきったことじゃないか」

ダルトン辺境伯と聞いて、チェルシーはハッとする。

王族に似た高位貴族なのに、元侯爵家のチェルシーが顔を見たことがない理由がわかってしまった。

ダルトン辺境伯の子どもたちである。

ダルトン領といえば、このレバレンジェ王国の歴史で海戦になればまず名前が出る要所だ。豊かな海域を巡り、海を挟んで向かい合うバゼル王国とは長年敵対関係にあった。

しかし当代の王が即位し、王弟が当時の辺境伯令嬢と結婚してダルトン辺境伯を継ぐと、その争いは一気に沈静化して争いが収まったという。圧倒的な知略と武力でバゼル王国を制したのは、もう二十年以上前の話だ。

チェルシーが生まれる前ではあるが、今の王国が平和なのはダルトン辺境伯のおかげだと、それこそ若い世代でもよく知っている。レバレンジェ王国が豊かな水産資源を維持しているのは、ダルトン領あつてのものだ。日本人であるキララの記憶があると、干した魚しか出回らない王都の状況に「豊か……？」と首を傾げてしまう。

（確かダルトン辺境伯の嫡男がわたしの四つ上……ってことはレオナルド様、二十歳!? 十歳くらい上に見えるんだけど!?）

今更驚いていることをどうにか隠しているチェルシーをよそに会話が進む。

「ふーん、バレンティノは彼女のことをこれ以上教えてくれなさそうだし、情報収集が必要だな。久しぶりに王都のレディたちにも会いたいしね」

「……いい加減、身を固めたらどうだ？」

「それはお互い様だろう？　むしろ君こそ早く婚約者を決めた方がいいはずだ」

バレンティノが押し黙る。二人の間に流れる空気は重苦しい。

しかし辺境伯の嫡男であるという前提でレオナルドの格好を見ると、イメージが変わる。胸元のボタンをいくつか外したシャツは先ほどまで軽薄な印象しかなかったが、鍛錬の結果、たまにしか来ない王都用の格好が息苦しくなったのだろう。

取り急ぎ親族である王家への挨拶だけ済ませて仕立て直し、といったところだろうか。

そんなことを考えていたチェルシーとレオナルドの視線が合う。するとレオナルドはすぐにまた、あの八重歯を覗かせた笑みを浮かべた。

（この人……絶対にモテる！ 女慣れしてる！）

チェルシーはそう確信し、バレンティノの厚意に甘えて遠慮なく彼の背を盾にした。

するとレオナルドは肩をすくめると再びチェルシー……というよりはバレンティノの前へと歩を進めた。

「チェルシー、オレはレオナルド・ダルトンだ。社交が苦手な親父の代わりにこの時期は王都に滞在する。よろしくな」

今度の手の伸ばされ方は握手を求めるもので、そうなると応じないわけにもいかない。

「チェルシー・ルーナ……チェルシーです」

いつもの癖で家名を言いかけて、言葉を止めた。もうチェルシーはルーナンド家の令嬢ではない

のだ。笑って誤魔化そうとしたが、眉が寄った自覚がある。困っているように見えたかもしれない。そのままレオナルドの手を握ろうとしたところで、バレンティノが彼の手を軽く弾くようにして退けた。

「テ、ティノ……？」

チェルシー自身もレオナルドを警戒していたのは確かだが、あからさまに敵意を剥き出しにしているバレンティノの態度に、困惑してしまう。小さく呼びかけると、バレンティノは、ハツとしたあとに視線を逸らしてしまった。

（いつもの優しいティノとは別人みたい……）

よほどレオナルドのことが嫌いなのだろうか。

「ハハ、信じられないな。まさかバレンティノのこんな表情が見れるなんて」

「……………」

「よほど大切なんだな。その子が……」

レオナルドの唇が綺麗な弧を描いている。

その顔を見てバレンティノがすかさず立ち位置をずらす。改めてチェルシーを背に庇う形だ。

それを見たレオナルドは、降参するように手を上げた。しかし声をかけたのはバレンティノではなくチェルシーに対してだ。

「チェルシー、また会おう。昼間は訓練場にいるから遊びに来てくれ！ 絶対だぞ？ 約束だ」

「あっ……はい」

訓練場とは、城に詰める騎士たちが鍛錬している場所だ。バレンティノもよく出入りしていると聞いたことがあるから、そこで会うなら安全だろう。

無意識にそう判断したこともあり、チェルシーは思わず頷く。

「夜に会いたいと言ってくれるなら、そうだなあ……レディには刺激がいつぱいの……」

「もう彼女に近づくな、声もかけるな」

「それは無理だろう？ 君のその顔を見たら尚更だ。子どもの頃を思い出すなあ」

「レオナルド！」

「おー怖い怖い。さて、オレは国王陛下に謁見でもしてくるよ」

チェルシーはその着崩した格好のまま行くのかと問いかけたくなかったが、空気を読んで口をつぐんだ。レオナルドはひらひらと手を振って去っていく。

そのままレオナルドを眺めていると、すれ違う侍女たちに親しげに声をかけている。侍女たちも頬を赤らめ大喜びでレオナルドと話していた。

（ティノはああたったけど、城のみんなに嫌われているって感じじゃなさそう。レオナルド様って、どんな人なんだろう。あとでみんなに話を聞いてみよう）

ひとまず後で王妃に話を聞こうと決めるチェルシー。その前でバレンティノは重たいため息を吐いた。彼は振り返り、チェルシーに向き直る。

「すまない、チェルシー……情けないところを見せてしまったね」

どうやらいつものバレンティノに戻ったようだ。

「ううん、少し怖かったけど……ティノこそ大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。どうもレオナルドの前だと昔から余裕がなくなってしまう」

「そうなの？」

「レオナルドは……僕の嫌がる顔が好きなんだ」

その言葉に目を丸くした。

バレンティノが誰かと友好的ではない様子を見せること自体は初めてではない。それこそ知り合って間もない頃、スサナが苦手だと言っていた。

だがスサナの場合は、正確には少し違う。お互いに自分とよく似ている部分が目につきすぎただけで嫌ってはいなかった。実際、セオドアとスサナが結ばれたとき、バレンティノは本心から喜び安堵していた。

レオナルドは違う。苦手ではなく、嫌いなのだとはっきりと表に出ていた。

そしておそらくバレンティノがここまで誰かを嫌うのは、本当に珍しいのだろう。頭をくしゃりとかいた彼は、自分の感情に戸惑っているように見えた。

そんなバレンティノの様子に、チェルシーはむしろ安心感を覚えた。いつも完璧なバレンティノの人間味のある表情を見られた気がしたからだ。

チェルシーは背伸びをして、手を伸ばす。驚く彼の乱れた髪を直した。

「チェルシー……？」

「ふふっ、ティノもそんなふうになるんだなって安心した」

「……え？」

「ティノはいつも完璧だからさ。わたしばかり泣いたり弱つてるとこ見せてたじゃん？ 何かあつたら話聞くからわたしを頼ってね！」

チェルシーはいつもバレンティノに助けてもらってばかりだ。

彼が怒っていたからといって嫌いになるわけではない。

それを伝えたかっただけなのだが……

「はい、髪直ったよ！」

笑いかければ、なぜかバレンティノの顔は真っ赤になっているではないか。

（そのくらいイライラしちゃったってことかな）

怒りで顔が赤くなったのかと思ったチェルシーは、バレンティノの頬に触れて微笑んだ。

「溜め込んでやってそんなふうになるより、わたしやケンとかに話して切り替えちゃった方がいいよ。せっかくイケメンなんだから、ね？」

後ろでネルとリリナがやきもきしているとも知らずに、チェルシーはそのまま話を続ける。

「ところで、ティノは何か用があつてここに来たんじゃないの？」

「あ、ああ……君が中庭に行くと聞いて、仕事が落ち着いたから見に来たんだ」

「そっか。今から花の種を植えるんだよ！」

「……そうか。気をつけてね」

いつもの勢いがないバレンティノは、チェルシーの髪をさらりと撫でる。

バレンティノの格好を見る限り一旦落ち着いたから顔を出してくれただけで、今日も公務なのだろう。少し離れた場所で従者が控えている。あまり待たせるのも悪い気がした。

「ティノはこれから公務？」

「……うん、そうだね」

彼の口が何か言いたげに開いたり閉じたりを繰り返す。

ようやく口を開いた瞬間に、痺れを切らした従者がやってきて彼の耳元で囁いた。バレンティノは小さくため息をついて頷く。

「もう行かないと……」

「うん、がんばってね！」

「チェルシー……レオナルドには気をつけて。なるべく近づかないでほしい」

真剣に告げられ、チェルシーは目を瞬かせる。

「……ティノ？」

「約束してくれないか？」

「う、うん！ わかった」

あまりの真剣さにチェルシーが頷くと、バレンティノは安心したように息を吐き出した。そして執事とともに慌ただしく去って行ってしまった。

バレンティノを見送ってから、チェルシーは再びハツとする。

「やばっ！ 庭師さんとの時間過ぎてる！」

リリナとネルに急こうと声をかける。

彼女たちは何かを言いたげだったが、約束の時間に遅れてしまったチェルシーは急いで中庭に向かう。庭師はもう種を持って待つてくれていた。遅刻したことに頭を下げて、手伝いを始める。

土だらけになりつつも庭師に指示を受けながら種を植えていく。

今日は日差しが強い。リリナとネルが日傘をさしてくれてはいるが、それでもじわりと額に汗が滲む。チェルシーは汗を拭いながら懸命に動いた。

どのくらい時間が経っただろうか。すべての種を植え終えたため、リリナがそろそろ休憩しようと声をかけてくれた。

チェルシーが立ち上がり、体を伸ばしていると……

「がんばってるねえ」

先ほど別れたばかりのレオナルドがやってきた。

「レ、レオナルド様……!？」

「かたいな。レオって呼んでくれ」

「ですが……」

チェルシーが迷っていると、冷たい瓶を渡される。

レオナルドが柔らかい笑みを浮かべながらチェルシーを覗き込んだ。

「冷たい飲みものをもらってきたんだ。よかったらどうぞ？」

「ありがとうございます！ あっ……!」